

会津型土師器の出自と外部波及の意義

菅原 祥夫

要 旨

会津型土師器は、信州－北陸－会津間の継起的交流が生んだ古墳時代後期の土師器圏であり、6世紀後半～7世紀前半に、中通り地方の拠点集落へ波及した。これは、同時期の置賜・村上地方－仙台平野間の動きに対応したもので、律令国家形成期に活発化した広域間交流の1つの側面である。

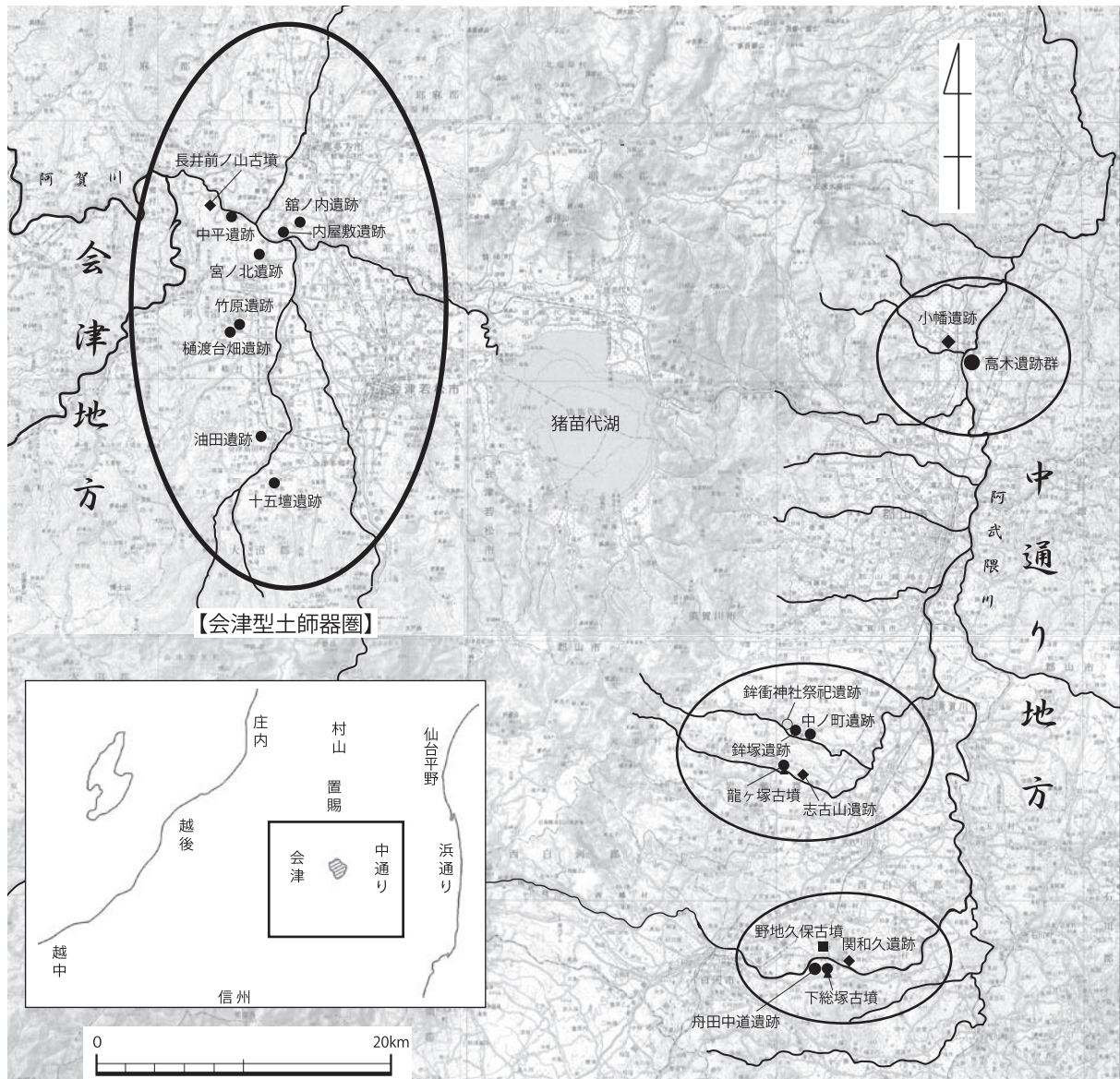
キーワード

信州～北陸 広域間交流





1 はじめに

古墳時代後期の会津地方は、東北地方の中で独自性の強い土師器圏を形成する。筆者は、同一特徴を備えた土器群が中通り地方の特定拠点集落で出土す

る現象に注目し、律令国家形成期に活発化した広域間交流の視点で検討してきた(菅原2004・2007・2013・2015)。ただ、論旨の主眼を関東系土師器の波及に置いたため、出自や意義の説明が不十分であったのは認めなければならない。そこで、小論で



第1図 遺跡分布図

舞台・栗圀式		坏C	丸底で、体部が屈曲し、口縁部が外反するもの。有段丸底坏の1つである。Ⅰ期に出現し、Ⅲ期に口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ、内面黒色処理が定着する。Ⅲ～Ⅳ期の坏組成の主体を占め、Ⅳ期以降は坏Eに主役を譲る。
		坏E	丸底で、体部が屈曲し、口縁部が内彎するもの。有段丸底坏の1つである。坏Cに後出し、Ⅲ期に出現。器面調整・処理は坏Cと一致。Ⅳ～Ⅴ期の坏組成の主体を占める。
会津型		坏J	坏Cに基本形は類似するが、当初から一貫して外面ヘラミガキ、内面黒色処理がほぼ例外なく施される。会津地方固有の細別器種である。Ⅱ期に出現し、Ⅳ期まで坏Kの脇役的存在である。
		坏K	坏Eに基本形は類似するが、器面調整・内面黒色処理は坏Jと一致。会津地方固有の細別器種である。Ⅱ期に出現し、Ⅳ期まで坏組成の圧倒的の主体を占める。舞台・栗圀式の坏Cに対比される存在である。

	時 期	実 年 代	畿 内 編 年	芥川 (1997)	太平洋側 (中通り) 編年
前半期	Ⅰ 期	5 世紀末～6 世紀初頭	T K23 ～ 217	Ⅰ 期	引田・佐平林式
	Ⅱ 期	6 世紀前半～中頃	M T15 ～ T K10	Ⅱ A ～ Ⅱ B 期	舞台式 (前) 住社・ 舞台式 (後)
	Ⅲ 期	6 世紀後半	M T85	Ⅱ C 期	
	Ⅳ 期	6 世紀末～7 世紀前半	T K43 ～ 209	Ⅲ A 期	栗圀式 (前)
後半期	Ⅴ 期	7 世紀中頃～後半	飛鳥Ⅱ・Ⅲ	Ⅲ B 期	栗圀式 (中)
	Ⅵ 期	7 世紀末～8 世紀前半	飛鳥Ⅳ～平城Ⅱ	Ⅳ～Ⅴ 期	栗圀式 (後)

第2図 時期区分と併行関係

はその欠を補いたいと思う。

なお、前提となる細別器種の分類と編年は、筆者の科研費研究論文に(菅原2007)に準拠した。これは、東北全域～北海道石狩低地の標準資料を16名の研究者と共同観察した視点を踏まえ、会津地方の約300点の土師器を分析対象に行ったものである(第2～5図)。発表後、まとまった追加資料は発見されておらず、変更の必要性はないと判断している。また、東北北部の研究動向に倣って、会津地方出土のものは「会津型」、外部地域出土のものは「会津系」という呼称で記述を進める。

2 会津型土師器の出自はどこか

会津地方は、阿賀川水系で新潟平野と結節し、日本海側内陸部における東北地方の南玄関口に当たっている(第1図)。そのため、時期によって強弱はあるが、太平洋側と異質な土器様相がみられる。ここで扱う会津型土師器は、Ⅱ期～Ⅳ期に盆地全体で展開したもので、Ⅴ期に中通り地方を含む太平洋側土師器圏へ吸収された。つまり、舞台式前半段階(6世紀前半)～栗圀式前半段階(7世紀前半)に併行し、栗圀式中段階(7世紀中頃)に消滅している(第2図下段)。

以下、主要器種である坏・甕の消長と製作技術変化(第3・6図)を基軸に、周囲の隣接地域と比較す

る方法で出自を特定していく。なお、細別器種全体の分類基準と消長の詳細は、菅原2007を参照されたい。

(1) 中通り地方との比較

会津型土師器成立前のⅠ期は、両地域間で坏の基本構成(A・B)が一致する。しかし、会津地方では坏Bが坏Aより優勢で、内面黒色処理の普及が早く、坏Cは確認できない。一方、甕は両地域間で基本形が一致しており、以後の展開も同一歩調を歩むが、地域色の強い甕A2dが少数存在し、継続的な消長を遂げた。また器面調整は、壺・甑を含め、5世紀からハケメ主体であり、Ⅲ期までヘラナデ主体の太平洋側と同一歩調をとらない。

会津型土師器存続期間のⅡ期～Ⅳ期は、坏の基本構成に違いが現れる。会津地方は口縁部が短く内彎した坏K、中通り地方は口縁部が長く外反した坏Cが主体を占め(第2図上段)、それぞれに客体に伴う細別器種(J:E)を含め、互いの接点があほとんどない。しかも、会津地方は外面ヘラミガキに固執しており、Ⅲ期までは内面黒色処理の比率の違いが認められる。また、高坏が坏に準じた動きを示し、同様の違いを見せる。ただし、Ⅳ期の甕は頸部に段を持つものが現れ、中通り地方に同調した変化を示した。

会津型土師器消滅後のⅤ期～Ⅵ期は、太平洋側の広域土師器圏へ吸収された。坏J・坏Kが消滅して、

会津	中通中	坏										高 坏		大型环	甕					甗	
		A	B	C	D	E	G	H	J	K	C	E	A 1 a		A 2 a	A 2 b	A 2 c	A 3 a	A	B	
前 半 期	I	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	II	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	III	■■■■	■■■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	IV	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	V	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
後 半 期	VI	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

第3図 細別器種の消長（会津地方と中通り地方中部）

栗囲式中段階と同じ坏C・坏Eの基本構成となり、甕は胴部形態の崩れたタイプに集約されていく。

このように、会津型土師器存続期間は、坏J・坏Kを指標に中通り地方との違いが顕在化した。

（2）日本海側との比較

それに対して、日本海側の隣接地域とは製作技術面できわめて強い関係性が指摘できる（第6図）。例外なく、坏の内面黒色処理はI期で普及し、甕の器面調整は5世紀からハケメ主体である。しかし、細別器種単位でみると、II～IV期に坏J・Kがまったく確認できないという決定的な違いがある。越後・庄内地方は、坏Aが終始主体を占める点で、越前・越中からの日本海沿岸土師器圏に連なっており、内陸の置賜地方は、村山地方と共にむしろ太平洋側土師器圏との共通性が強く（坏C・坏E、甕の基本形）、製作技術で栗囲式の成立要件を先取りした（黒色処理・ハケメの画一化）。したがって、日本海側の隣接地域と関連しながらも、直接の出自は別に想定するのが妥当と思われる。

（3）信州との関連

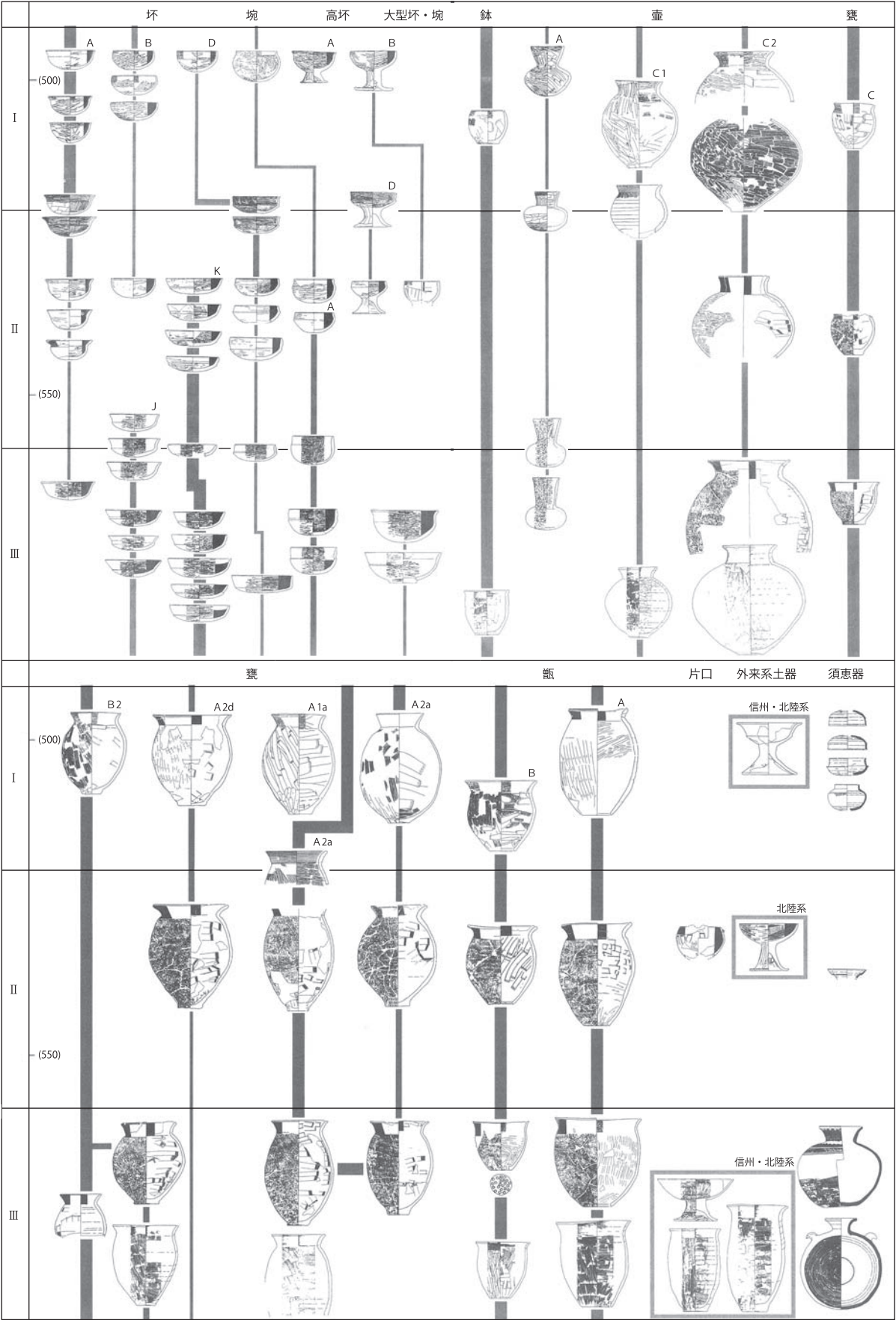
では、具体的にどこに求められるだろうか。

まず、その手掛かりを当時の地域間交流に求めてみたい。I期～III期の会津地方では、信州・北陸系

土師器が継続的に認められる（第7図上段）。このうち沿岸の北陸に関しては、前述のように出自の候補から外れるが、内陸の信州は、II期併行期に伝統的な坏A+新出の坏J・坏Kの類似した組成内容が認められ（同図下段）、甕は5世紀以来ハケメ主体であることから、可能性が浮上する。

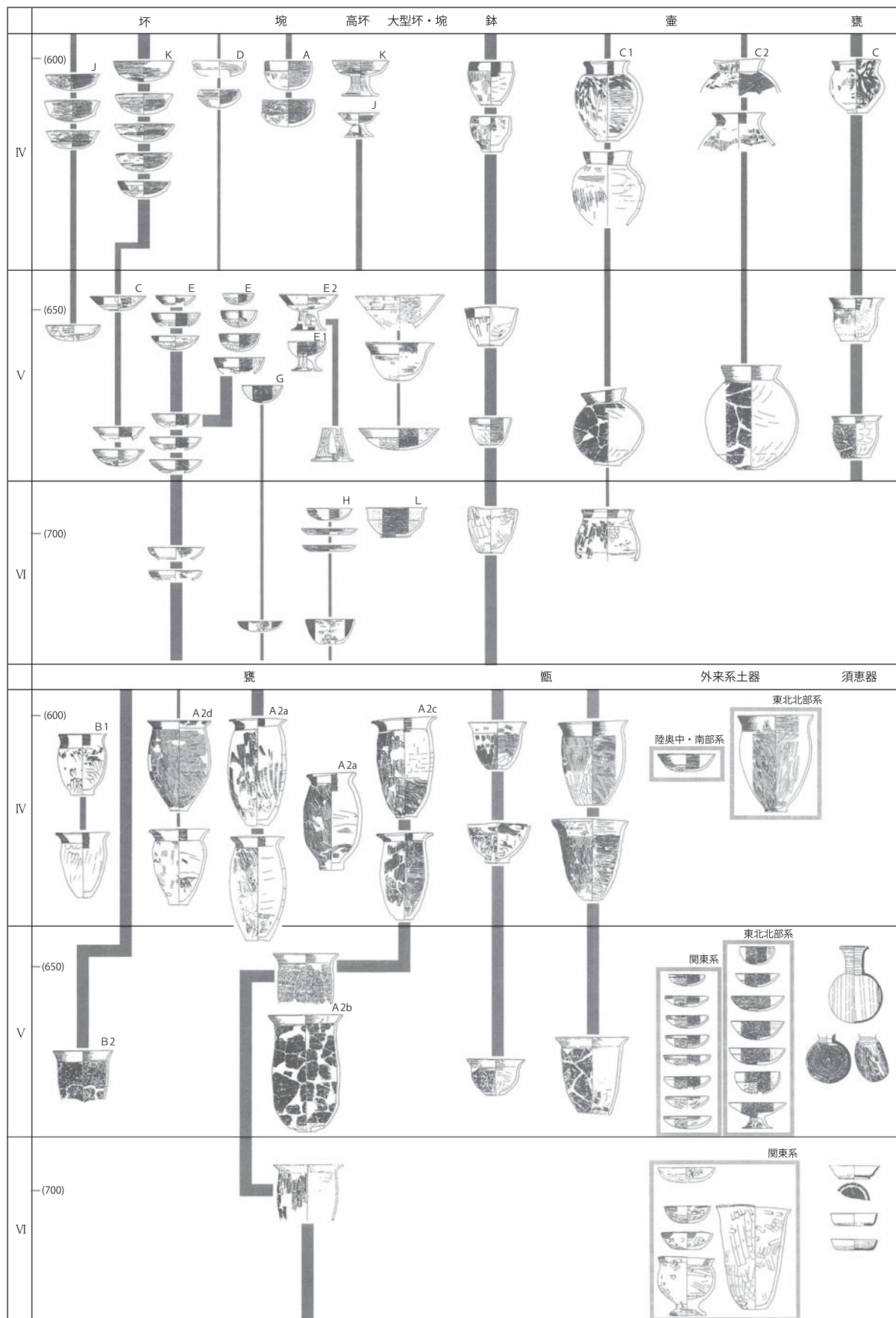
太平洋側の感覚では、遠隔地の両者を結びつけるのは唐突かもしれないが、実は新潟平野を扇の要として信濃川・阿賀川の水系単位で結ばれた地域であり、河口間の距離はわずか5kmしか離れていない。このことは、5世紀後半に信州で出現した黒色処理が、日本海側を通じて東北地方に伝播したという指摘（長谷川1989）と符合しており、前後をみても、5世紀前半の長野盆地に中心分布を持つ合掌型石室が会津地方に飛び石的に確認されること（菊地2002）、7世紀後半に信州・上野で出現した蕨手刀が中通り地方～会津地方に分布していること（黒済2018）、9世紀の北陸型土師器煮炊具のセットが信州・会津地方の両方にまたがって分布し、燃焼部石組み構造の須恵器窯に類似した分布状況が窺えることに（菅原2010）、対応している。

このように、信州—北陸—会津間の交流は継起的に認められ、会津型土師器は6世紀のそれが生んだ



菅原 2007 に加筆

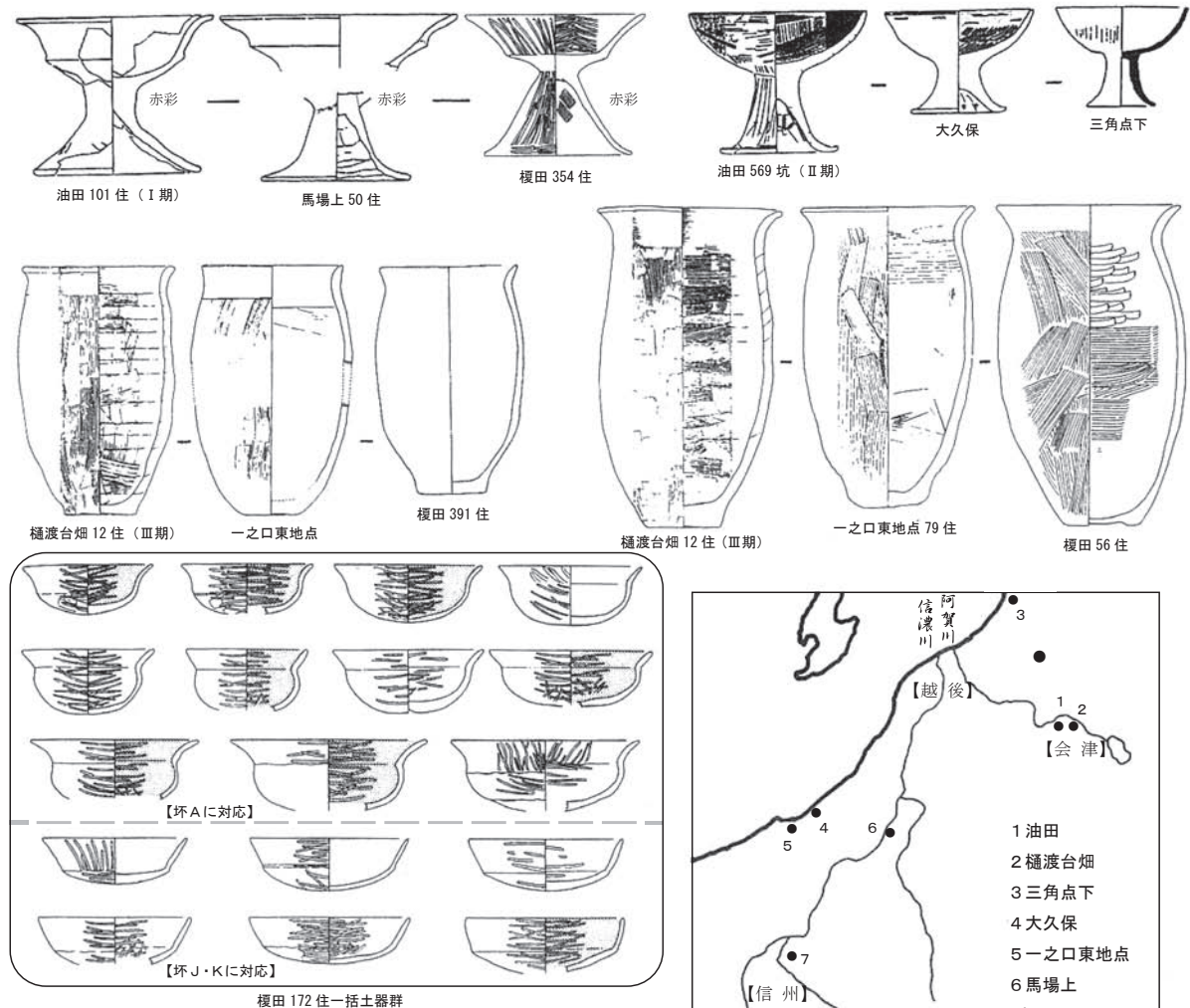
第4図 会津地方の土師器編年（1）



第5図 会津地方の土師器編年（2）

分類	環 A					環 C					環 J・環 K					環黒色					環ハケメ				
地域区分	中通り	置賜	会津	越後	庄内	中通り	置賜	会津	越後	庄内	中通り	置賜	会津	越後	庄内	中通り	置賜	会津	越後	庄内	中通り	置賜	会津	越後	庄内
I 期																									
II 期																									
III 期																									
IV 期																									
V 期																									

第6図 属性の比較



第7図 会津型土師器の出自

信州出自の土器様式と考えられる。

ところで、太平洋側の土師器変遷の中で大きな画期とされる栗圀式の成立(辻1990)は、製作技術の指標(黒色処理・ハケメ)が信州～北陸方面の出自であり、直接の故地は、会津地方と同じ日本海側内陸の置賜・村山地方に求められる(菅原2013)^{註1}。会津型土師器の中通り地方への波及は、この視点から捉える必要がある。

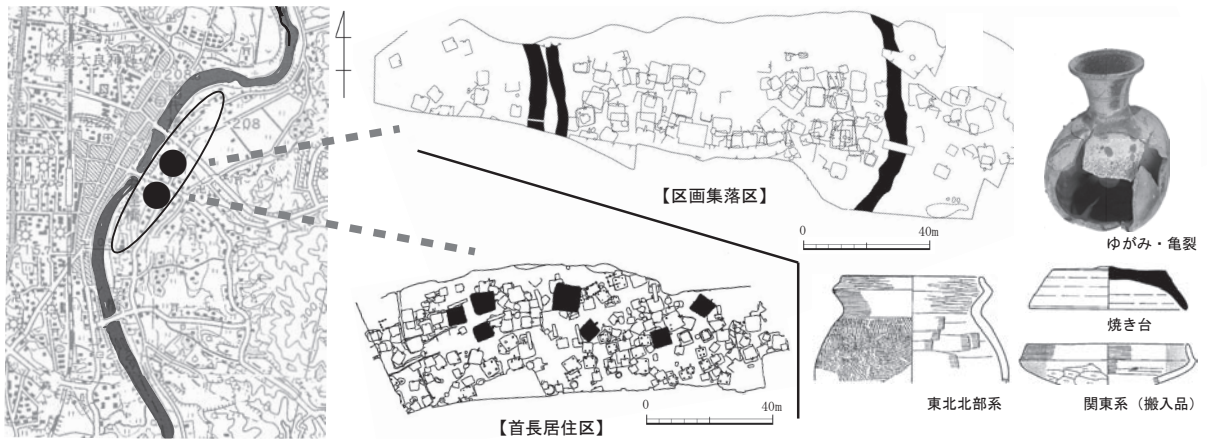
3 外部波及の様相

では、それを踏まえ、まず筆者が発掘調査と整理作業に携わり、報告書不掲載資料を含めすべての出土土器に目を通した、本宮市高木遺跡群(県教委調

査分)の事例分析から始めたい。

(1) 高木遺跡群の事例分析

高木遺跡群は、中通り地方中部の阿武隈川右岸に所在する(第1図)。安積北部(のちの安達)の拠点集落の1つで、東山道安達駅比定地の小幡遺跡と対岸の位置関係にある。発掘調査の結果、長さ約2.1km、面積約30万㎡に及ぶ長大な自然堤防上全体を埋め尽くして竪穴建物が営まれたことが判明し、これまで検出された竪穴建物数は650棟を超える。うち約8割が7世紀中心のⅢ期後半～Ⅵ期の所産であり、なかでも急成長・ピークのⅢ期後半～Ⅳ期には、集落中央の旧河道を挟んで首長居住区と区画集落区が対峙した(第8図)。当該期は、阿武隈川対岸に継続



第8図 高木遺跡群の構成

展開した首長墓系譜(古墳時代前期～後期後半)が突然途絶え、集落背後の低丘陵上で問答山・根岸古墳群が出現したことから、律令社会形成につながる構造的な地域再編が起きた様子が窺える。副葬品には圭頭太刀がみられ、被葬者は有力豪族が含まれたことが推測できる。

①会津系土師器の概要

会津系土師器は、このⅢ期後半～Ⅳ期に認められる。確認したのは、報告書掲載資料で54点(第9図)、整理作業で分別した不掲載資料を加えると優に100点を越える。坏J・坏Kのほか、頸部のすばまりが弱い寸胴の信州・北陸系甕があり、他にも抽出できなかったものが推測される。また、この数に加え、肉眼観察ではあるが、在地型式の土師器と胎土・焼成の違いが認められなかった意義は大きい^{註2}。出土地周辺で製作されたことを示唆し、人の移動が推測できる。

②会津系土師器の分布

溝内幅で南北約110mの区画集落区に、圧倒的な集中傾向がみられる(第9図)。このエリアでは坏C主体の竪穴建物が皆無であり、外部との土器様相の違いは明瞭である。この点は、出土した竪穴建物分布(A～D)のうち、区画外のAが小型1棟の単期存在なのに対し、囲郭集落区のB～Dは大型1+中・小型2～3棟の構成で、移動・建て替えをしながら一定期間存続した様子にも示されている。

③同時期の集落景観

区画集落区と対峙した首長居住区は、一辺13mの超大型竪穴建物を大～小型竪穴建物が弧状に取り囲み、関東地方の形態・技術要素を持つ在地産須恵器の集中保有が認められる。区画集落区とその周辺

から、表面漆仕上げの関東系土師器坏(搬入品)・焼台・須恵質焼成粘土塊・焼きゆがんで亀裂の入った不良品が出土しているのは、この点で示唆的と思われる。定住か一時滞在かの問題はあるが、近隣で窯を営んだ関東出自の工人を抱えた可能性が高く、同様のことは、集中する鍛冶工房の存在にも指摘される。また、片口・内屈の口縁部特徴を持つ東北部系土師器甕が出土しており、複数の外来系要素が交錯した(第8図右)。

さらにもう一つ重要なのは、南北区画溝と周囲の後背湿地落ち際で、祭祀行為が頻繁に行われている点である。浅い掘り込みを伴う集石上で火が焚かれ、伴う祭祀遺物には通常墳墓へ供給される特殊器物(甕・提瓶・横瓶・鉄刀・銅釧)と祭祀固有の土製品(六鈴鏡・釧・勾玉・管玉・丸玉・平玉・手捏ね)が認められる。質・量ともに集落祭祀の範囲を越えており、のちの駅推定地との位置関係を勘案すると、交通関連の祭祀目的が考えられる。北区画溝(SD02)の隣接区から、その小幡遺跡所要瓦と同じ叩きを持つ8世紀前半の丸・平瓦片、7世紀末～8世紀前半の土師器製柄香炉、蓮華文をかたどった金銅製座金、小型円面硯(朱付着)が出土しているのは、この見方を裏打ちしてくれる(菅原2004)。区画集落区に面した阿武隈川には、現在、昭代橋が架かっており、当時も渡河点であった可能性が高い。

以上のように、高木遺跡群の会津系土師器は、集落の急成長・ピークのⅢ期後半～Ⅳ期に認められた。それらは、故地からの人の移動に伴い製作されたもので、背後には、律令社会形成につながる地域再編の諸要素(新規首長墓の出現、官衙と対岸の位置関係、渡河点に面した立地、交通に関わる祭祀、

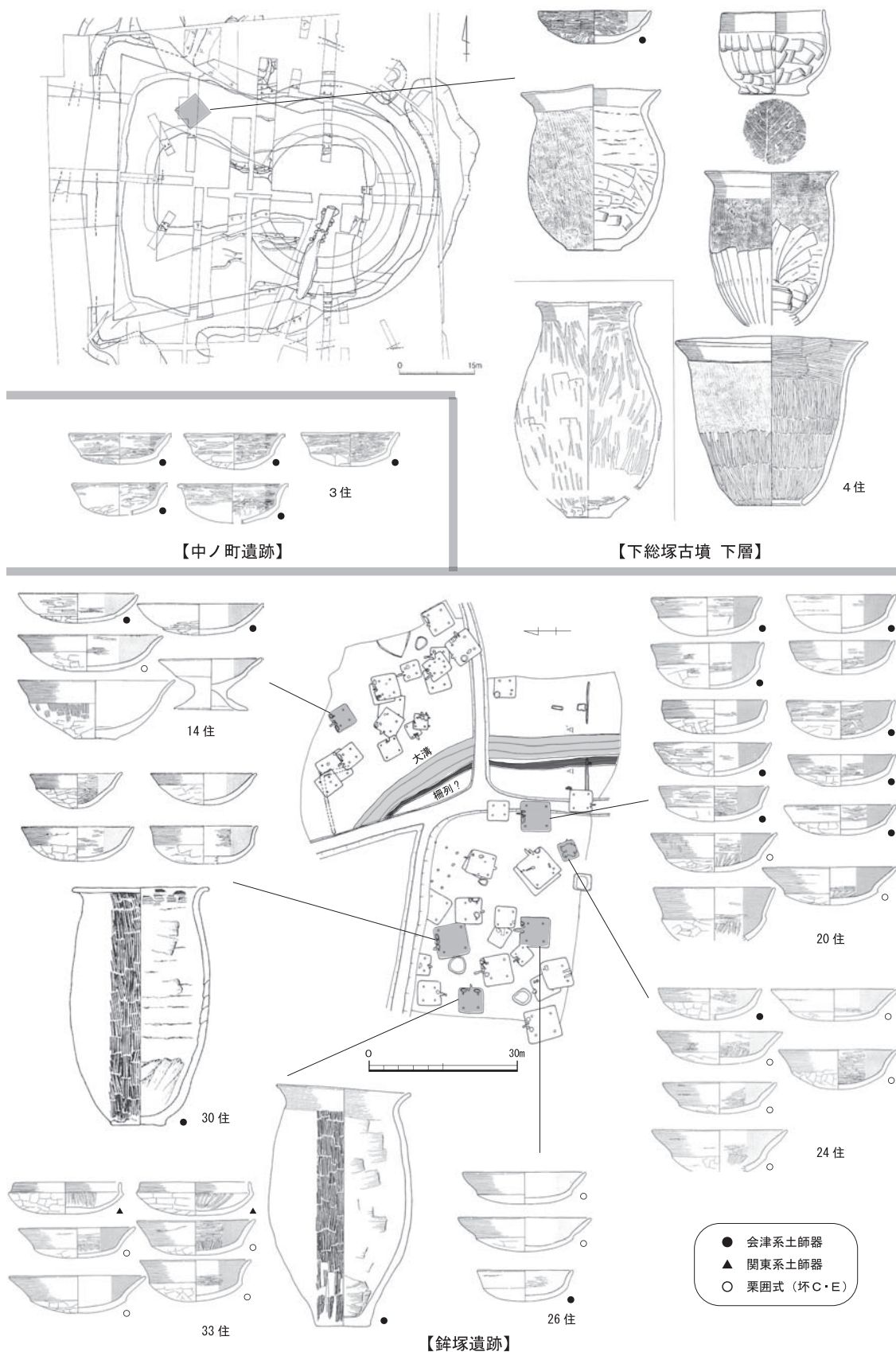
では、この様相が普遍性をもつのかどうか、他の事例で検証してみたい(第10図)。



(2) 鉾塚遺跡・中ノ町遺跡

鉾塚遺跡・中ノ町遺跡は、中通り地方南部の阿武隈川支流(江花川)右岸に所在する(第1図)。石背西

部の長大な拠点集落で、9世紀に志古山遺跡の倉庫群を成立させた釈迦堂川流域と共に、石背中枢部に対峙する有力豪族圏だった。背景は、勢至堂峠越え



で会津地方へ抜ける交通の要衝の立地に求められ、鉾塚遺跡はその象徴的存在とも言える鉾衝神社祭祀遺跡(Ⅱ期～Ⅳ期)と、江花川対岸の近接位置にある。

一部の遺構・遺物図面しか公表されていないが、急成長・ピークのⅢ期後半～Ⅳ期には、鉾塚B地区に区画集落区が設けられ、付近の低丘陵斜面で才合地山横穴墓群、釈迦堂川流域では、志古山遺跡の近距離に龍ヶ塚古墳(前方後円墳)の出現が確認される。

会津系土師器は当該期の所産とみられ、口縁部が長く外反した坏C(+坏E)の共伴と矛盾しない。確認したのは、報告書掲載資料の18点で、未公表資料を勘案すると、実際には数倍に及んだはずである。坏J・Kのほか、信州・北陸系甕があり、どの程度実態を反映しているのか問題だが、鉾塚B地区の囲郭集落区に集中傾向が認められる。また、器形・質感を忠実に真似た非内黒の関東系土師器(在地産)が共伴している。

(3) 舟田中道遺跡(下総塚古墳を含む)

舟田中道遺跡は、中通り地方南部の阿武隈川右岸に所在する(第1図)。白河国造・大領の本拠地だった拠点集落で、郡衙の関和久遺跡、上級官人墓の野地久保古墳と対岸の位置関係にある。存続期間は5世紀～9世紀後半にわたり、このうち白河国造に関わるⅢ期後半～Ⅵ期には、近距離間で大型豪族居宅、前方後円墳(下総塚古墳)の存在が判明している。

会津系土師器は当該期のもので、報告書掲載資料の坏J・坏K 20点がある。出土した竪穴建物分布(4・30・85・95・122住)は、豪族居宅の内部・外部、下総塚古墳下層に及ぶが、出土土器の一部しか実見しておらず、今回は下総塚古墳下層資料の提示のみにとどめたい(FP降下後:古墳築造前、第9図上段)。報告書図版を見ると、坏J・JKに類似した器形が一定数みられるため、資料が増加し、分布の傾向性が抽出できる可能性がある。

小 結

高木遺跡群の様相は、特定拠点集落に概ね普遍的なものであった。外部波及が隣接地域間の自然発生的なものであれば、このような現象は起きないはずである。

4 外部波及の意義

実は当時、仙台平野－置賜・村山地方間で、在地社会の逆転が起きている。置賜・村山地方では、5世紀後半から継続した集落・古墳が軒並み姿を消し、それまで停滞していた仙台平野では、集落・墳墓の営みが突然活発化した。これは、栗囲式の成立と対応しており、会津型土師器の中通り地方への波及は、無関係ではないと考えられる。律令国家形成期の東北地方は関東地方の影響が強調されるが、土器様式を規定したのは、信州～北陸経由の動きである。最後に、多面的な歴史評価の必要性を指摘し、その意義を強調したい。

【註】

註1 置賜・村山地方が、成立当初の陸奥国領域内に編入された背景が指摘できる。また、坏だけをみれば、信州に接した上野北部も栗囲式の故地の候補となるが(後田型)、甕はケズリ主体であり、棄却される。

註2 会津地方の竹原遺跡5号住居跡から出土した栗囲式土師器坏は、胎土・焼成が会津型土師器坏と明確に区別できることから、搬入品であることがわかる。

【引用参考文献】

(論文)

相田泰臣 2004「越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相」『新潟考古』第15号

菊地芳朗 2002「福島県会津坂下町長井前ノ山古墳」『月刊考古学ジャーナル 492』ニュー・サイエンス社

黒沢和彦 2018『麻手刀の考古学』同成社

菅原祥夫 2004「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代日本の集落』同成社

菅原祥夫 2007「福島県中通り地方南部・中通り地方中部・浜通り地方南部・会津地方」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成15～18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書

菅原祥夫 2010「東北」『古代窯業基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社

菅原祥夫 2013「陸奥南部の国造域における大化前後の在地社会変化と歴史的意義」『日本考古学』第35号 日本考古学協会

菅原祥夫 2015「律令国家形成期の移民と集落」『東北の古代史3

蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館

広田和穂 1999「古墳時代中期～後期」『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター

辻 秀人 1990「東北古墳時代の画期について(2)」『伊東信雄先生追悼 考古学・古代史論攷』

長谷川厚 1988「黒色土器－出現と背景－」の成果と課題』『東国土器研究』第2号 東国土器研究会

※紙幅の関係上、発掘調査報告書は割愛した。